



第83回（平成25年3月13日）定例会の研究発表要旨

## 拓北農兵隊手稲分隊の入植の経過と苦悩

星置 村元 健治 氏

～今何故に拓北農兵隊か～

拓北農兵隊が昭和20年(1945年)手稲曙地区に入植して早、70年近くなろうとしている。今や同地区はすっかり住宅化されて昔の面影を残すものも無いが、東京杉並区の16戸の戦災被災者が、この地区に入植し、血と涙と汗の果てに今日の曙の繁栄の基礎を築いたのは紛れも無い事実だ。

そのことが意外と知られていない。とりわけ若い人はまったく知らない。

開拓に関わった当事者も残り少なくなった今日、その取り組みをきちんと掘り起こし、後世に伝える必要がある。

簡単に、拓北農兵隊手稲分隊の概要を紹介すると、1945年7月に東京の杉並区の農業経験の無い様々な職歴の戦災被災者達が、疎開と食糧確保のため政府(内務省)が立てた北海道に入植させる事業(北海道集団帰農者募集)に応募して、手稲村の曙地区に入植し、様々な困難を乗り越えて、今日の繁栄の基礎を築いたというもの。

戦争末期の混乱の中で、受け入れ態勢も十分でない中で緊急かつ応急的に事業が進められたために、宣伝計画されていた内容には程遠い現実が待っていて入植被災者たちは塗炭の苦しみにあった。

それらは住居、食糧、土地問題に象徴されたので、改めてこれらの苦悩について紹介することにしたい。

### 《住居問題》

計画では用意されているとあつたが、現実にはそのようなものではなく用意されていたものは、元牛舎という代物だった。牛の尿が強烈に漂う窓も無く雨漏りのする狭い部屋に雪が降るまで収容された。

この後、近くの唐松林を伐採して、素人ながらも掘って立て小屋を建て、入居するも地吹雪の激しい同地区で初めの厳寒の冬を、死ぬ思いで耐えなければならなかった。

### 《食糧問題》

計画では主食の配給を約束していたが、現実には遅配気味の上、その量も決して十分なものではなかった。持参の食糧も無くなり、止む無くワラビを採取するとともに食糧確保も兼ねて援農にも出たが、受入農家から歓迎されるどころか農業経験なし、栄養失調状態での労働ゆえ、不信すら持たれる始末だった。

厳寒を迎え、栄養失調からくる餓死者を出すのみならず、ようやく春を迎えてからも2人目の犠牲者が出るなど大変な状況に直面した。

### 《土地問題》

計画では、とりあえず1町(ha)を無償貸付し、その後10～15町を無償貸与もしくは付与するというものであつたが、現実に入植当初も割当農地は決まっておらず、ようやく2年目に地主の好意で、わずか3反(0.3ha)の土地しか借りれないという状況だった。

その後、3町、4.5町と割当がされていったが、この土地問題では特に問題であったのは、過去の入植者たちも逃げ出すような泥炭と湿地の混じるいわく付きの土地だったことである。要するに誰も入植したがいらないような悪条件の土地に入植させられたということであった。

このために入植者たちは、その後開拓農協(手稲曙開拓農協)の下で、10年間にもわたる土地改良、客土事業に取り組まざるを得なかった。

～戦争間際の混乱期の棄民政策だったのでは～

以上紹介してきたように、計画約束されていたはずの内容が全く現場では、なされていなかったといえよう。

彼らをして非常に苦難・悲劇をもたらしたのは、上記で指摘したように、この事業・施策が終戦間際の混乱の中で打ち出されたものだったことにより、十分な体制がとられていない状態で進められたことに起因している。

とりわけ入植者たちを打ちのめしたのは、終戦により計画推進した内務省自体が消滅することにより、拓北農兵隊も存在しなくなるという状態に陥ったことと、その後の関係機関の不誠実な対応に直面させられたことであつた。

その意味で、この拓北農兵隊は、かつての屯田兵とかその後の戦後緊急開拓事業等と比べても、比較にならない苦難を強いられ、その意味では棄民政策でもあつたと思われる。

# 手稲の歴史資料(記念碑)保存への取り組み

## 前田農場『東宮駐鞏記』

曙 茂内 義雄 氏



及川さん宅の記念碑前で前田利祐氏(右から二人目)

西友の向こうの線路縁に前田農場の場長が住まわれていた建物があり、その庭には、由緒ある記念碑があった。それは札幌市にとっては重要文化財に相当するものである。前田農場が売却された後は、その地を管理していたのが及川さんである。

ある日、その及川さん宅が整地されているのを、当会会員濱埜さんが見つけた(2月19日)。整地作業が始まって10日ほど経過していたと思われる。記念碑は廃棄直前の状態で放置されていた。

早速、当会の会員の数人が奔走した(20日)。まずは、現場へ赴き、作業現場のダンプの運転手に事情を説明し、関わって

いる不動産業者の担当者と携帯電話で連絡を取った。作業はまもなく建物の建築が行われるところまで進んでいた。社長の了承が得られれば工程変更も可能であるということであった。

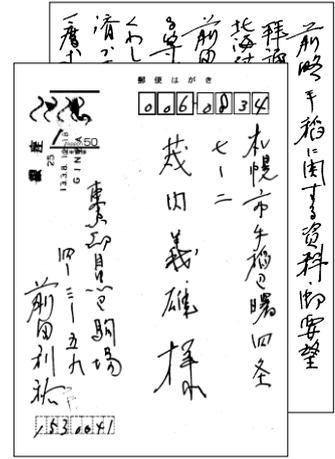
その場で、社長と電話連絡。碑を持って行くことは良いがすぐに撤去してほしい。いつ搬出できるか今晚中に返事をほしい、とのことであった。

それから、運搬してくれるところを探すのが大変であった。重機を備えている業者でも、大雪の後の排雪作業で多忙を極め、日程に余裕の無いのが実状である。その中で、工面して協力してくれるという造園業者を捜し当てることができた。早速、不動産業者の社長に事情を説明して、移動するまでの期間、整地の邪魔にならない場所に置かせてもらえるよう懇願して、了承を取り付けた。次の週予定通り運搬して、今は搬送していただいた造園業者の敷地に仮置きしている。

今後の手はずとしては、組織が前田家から譲り受けるということであろう。まずは、受け皿の組織づくりが必要である。そこで、この手稲郷土史研究会に後押ししていただいて、プロジェクトチームを立ち上げたいので、ぜひ皆さんのご賛同をいただきたい。チームの名称としては、例えば、「史跡保存会『前田農場と大正天皇(皇太子行啓)記念碑』」とでも…。

明 治 四 十 四 年 秋 八 月  
東 宮 行 啓 北 海 道 二 十 五 日 過 石 狩 國 經  
川 特 駐 鞏 吾 前 田 公 農 場 而 台 覽 焉 先 是  
鶴 駕 浴 臨 公 各 所 築 而 今 又 及 此 洵 恩 遇  
之 至 榮 者 農 場 諸 君 感 謝 圖 報 効 敦 業 服  
勞 爲 世 模 楷 他 日 良 田 增 而 收 穫 多 牧 芻  
豐 而 牛 羊 蕃 則 於 國 家 治 本 阜 物 之 舉 諸  
君 亦 可 謂 與 有 力 矣 而 台 旨 與 公 奉 上 之  
誠 意 庶 幾 不 孤 焉 乎 公 命 近 影 記 刊 石 以  
傳 後 乃 謹 誌 歲 月 并 附 一 言 云  
侯 爵 前 田 利 爲 家 額  
石 川 龍 三 謹 書

因みに、この碑に刻まれている碑文(左のコピー文)は、「明治44年8月に、皇太子が前田農場に立ち寄った場所である」と前置きして、「諸君、よく頑張っていますね、お陰で農地もだんだん広がっていています…」とあって、農場で働く小作の人たち、事務所で管理業務に携わっている人びとに感謝と激励の意を込めて、当時の場長・前田利為侯が記したものである。



まずは、前田家とのコンタクトが必須と考えると、前田家の第18代当主・前田利祐(としやす)氏と手紙で連絡をとり、情報をいただいているところである。

この前田利祐氏が15年前に、札幌を表敬訪問されたときに取材記者として会員の一ノ宮氏が同行している。その折、この行啓記念碑の前で記念写真を撮られている。(上の写真)

今後の業務としては、関係機関との連携、公文書整備、募金活動、設置後の活用資料作成などであろう。(文責:小田真二)

### 次回の予定

次回(5月8日)は、立花邦雄会員の研究発表「札幌の除雪の今昔」と齊藤隆夫会員の研究発表「手稲山頂からキリマンジャロ頂上へ」を予定しております。

会場は、視聴覚室です。